本田市長のど～んとコミュニケーション

真珠のように輝く
まちづくりのために

vol.61

尖閣諸島と今後の日本

尖閣諸島をめぐる日本と中国の間の領有権問題。とても嫌なニュースであったと、わたしは感じました。

中国は、国をあげて力の外交を展開したのに対し、日本政府は地方の検察の判断に国益をゆだねてしまったように映りました。

20世紀の後半には、「21世紀は日本の時代である」と言われたこともありました。しかし、今やそんなことを信じる人はおりません。中国は日本に比較して20倍の国土と10倍の人口を有し、世界の政治や経済に対し、ものすごい影響力を持つようになりました。軍事力も着々と増強をしています。

産業技術も日本をはじめ、諸外国から多く流入し、今や日本に頼る必要はなくなってきていると言っても過言ではないでしょう。これまでの両国の国民感情を考えると、中国とのつきあいは非常に難しいものになっていくような気がします。

日本は、中国とは同じ舞台で戦うことはできないと思います。戦っても負けるであろうことは、今回の事件の結果をみても明白です。言いかえれば、争えば日本のほうが失うものが多いということであると思います。では、これからの日本はどうしていけば良いのでしょうか。

第一にひとつの国や地域に頼りすぎないということを、日本は心掛けていかなければいけないと思います。

原油の輸入にしても、中東ばかりに頼りすぎず、ほかの地域への働きかけを強化したり、原油にかわる新エネルギーの開発に対してもっとお金も努力も増やすべきだと思います。

産業振興も中国だけに頼らず、少々不利な点があっても、ほかの国々にもっと目を向けることが長い視点でみると必要なことだと思います。そうした動きが、中国の日本を見る目を変えると思います。

第二に、日本の立場や考えかたを、もっと世界中に対して、丁寧に説明していくべきだと思います。相手の悪口を言うのではなく、こちらの考えが良識的であり、諸外国から見ても、納得してもらえるものであることを、粘り強く発信していくことが大事だと思います。

日本という国は、民主的であり、好ましい国だということを世界中の国々にわかってもらうことが大切なことでしょう。

人権文化の花を咲かせよう

Vol.100

視点

先月、名古屋市において国連生物多様性条約第10回締約国会議（ＣＯＰ10＝名古屋会議）が開催されました。

条約には、日本を含む１９３の国と地域が加盟し、「健全で豊かな生物多様性は将来にわたる暮らしの安全性を保証する」ものと位置づけられています。

そこでは加盟国がおかれたそれぞれの立場もある中、生物多様性を守ることで、その恩恵である医薬品開発や生きる上で欠かせない環境資源などを次世代に残すための新たな目標や方策が、多くの参加者で話し合われました。

わたしたちはとかく、何が、いくら分の経済的価値があるのかといった「ヒトの視点」で物事の意味を語りがちですが、地球上のあらゆる生命が「人間のためだけに存在しているわけではない」ということを忘れてはいけません。

この条約が作られた時、その前文の原案には、次のような文章があったそうです。

「人類が他の生物と共に地球を分かち合っていることを認め、それらの生物が人類に対する利益とは関係なく存在していることを受け入れる」

この文章は、最終的に削除されてしまいましたが、目先の利益にとらわれず、われわれは本当の意味での豊かさについて考えることができる人類であると信じたいと思います。

常に「視点」について意識する事は、人権意識の向上にも役立つのではないでしょうか。